

姫路文学館では、エッセイストとしても人気の高い藤原正彦姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）が「読書」とともに推奨する「書くこと」の大切さを伝えるため、平成二十七年六月に「藤原正彦エッセイコンクール」を創設しました。

本賞は、中学生以上を対象とし、藤原館長の審査により、中学生部門、高校生部門、一般部門の各部門につき最優秀賞、優秀賞、佳作各一編を選考するものです。

第二回目の今回は、全国から一〇〇二点の力作が寄せられました。

〈生きることは創ること〉——藤原正彦館長の言葉です。

何気ない日常、出会った人や書物、あるいは孤独や沈黙も、心のどこかに宿り自分自身をつくり続けているはずです。

このコンクールを通して、多くの方々が、自分を見つめ、考え、文章にする機会を持たれましたら幸いです。

目次

■中学生部門

最優秀賞 「さくらの季節」	兵庫県 小林聖心女子学院中学校	一年	小西 野杏	4
優秀賞 「帰り道」	兵庫県 姫路市立城山中学校	三年	長谷川 蒔	7
佳作 「大人と子ども狭間」	兵庫県 姫路市立広畑中学校	二年	結城 潮音	10

■高校生部門

最優秀賞 「うら」	兵庫県立姫路西高等学校	二年	岩間 成美	14
優秀賞 「頑張るということ」	兵庫県立加古川東高等学校	一年	小林あかり	17
佳作 「お手頃な幸せ」	兵庫県 姫路市立琴丘高等学校	二年	中川 知優	20

■一般部門

最優秀賞 「世界を名付ける」	兵庫県 姫路市 (主婦)	天野 浩子	23
優秀賞 「また会う未来のために」	宮城県 気仙沼市 (自営業)	感王寺美智子	26
佳作 「嘘の功罪」	広島県 広島市 (無職)	榎並 掬水	30

■概要

概要	34
----	----

第二回 藤原正彦エッセイコンクール 入賞作品集

中学生部門

最優秀賞

兵庫県 小林聖心女子学院中学校 一年

さくらの季節

小西 野杏

一月の半ば。私のもとに、一通のはがきが届きました。手紙を相手に送ったから、その返事が届いただけなのに、それを読むと不思議に胸が熱くなります。何度読み返しても同じことです。

私の大叔母は日本画家であり、先生でした。他人から見れば、遠い親戚ですが、私にとってはお婆ちゃんのような存在でした。そして彼女が時々送ってくれるはがきに私は目をうばわれ、やがて文通をするようになりました。ペースは月に一度程度。毎週その手紙を楽しみにポストをのぞきながら過ごす日々でした。

しかし、彼女は大きな病を患っていました。医者に余命宣告をされても生き抜こうという強い信念を持っていましたが、病が全身に転移し、日に日に体を思うように動かさなくなっていく、最終的には毎日を病院で過ごすようになりました。

その分、私のもとに手紙が届かなくなっていました。毎日ポストをのぞいても、届くのは、不動産の広告やピザの広告ばかりでした。

また、私の両親はどちらも働いて、姉も学校や塾で帰りが遅かったりと、家に帰ると大抵一人の私にとれば、よりさみしさが増していく一方でした。

春休み、祖母から大叔母のいる広島に一週間程来ないかと誘われ、私は行くことにしました。新幹線に乗って広島へ行き、周りにはカープファンの人や外国人観光客が大勢いました。そんな人波をかき分け、さっそく病院へ向かいました。ガヤガヤとした日常からかけ離れた静かな病院の七階へ。その七階は緩和ステーションと呼ばれ、病院の最上階です。エレベーターで向かうときはいつも最後まで、乗っている人や乗ってくる人々を見送っていました。看護師さんはどの人も優しく笑顔のステキな方々で安心しました。病室に入ると、彼女の姿が。しかし、何本ものチューブにつながれ、思わず目をそむけたくありませんでした。それでも私は彼女と話したくて、病室へ来るたび、いっしょに韓流ドラマを見たりしました。その後、自宅へ帰った私は祖母から「大叔母の絵を病院で寄贈することになったからぜひ見においで！」と連絡を受けました。たくさんの作品を彼女は残していたため、それをどこに寄贈するかなやんでいました。その絵を見に行くと思わず言葉を失ってしまいました。学校の教室のドアより少し大きく壮大な雪山が描かれていました。彼女自身はこれで他の患者さんもいやされたらいいな、と控えめました。

それから久しぶりに、大叔母からはがきが届きました。一月半ばのことです。読むうちに

胸が熱くなり、それはやがて涙としてほおからこぼれ落ちました。はがきは、前とくらべて、字が大きく、脱字が増えてるように感じました。しかしそこには桜がはつきりと描かれています。まだ冬だというのに。文章には、「たくさんのお文をありがとう。とても嬉しかったですよ。——私もがんばっています。のあんもガンバッテネ。」最後はなぜかカタカナでした。それを機にはがきはもう届かなくなりました。

そんな大叔母とは葬儀場で再会しました。もう話しかけても返事をしてくれない彼女に私は思わず涙をこぼしました。できることならまた話したい、会いたいという思いがまだ胸にあります。そして彼女ははがきに描いた桜の季節、四月十七日に永眠しました。

人の死は人に大きな影響をあたえます。私の場合、命の尊さと今を生きる大切さを痛感しました。あたりまえなことですが、私にとれば、身近にあるけど気づきにくいことです。それに気づけた今、私はすっかり背ののびた向日葵を見守りながら通学しています。

中学生部門

優秀賞

兵庫県 姫路市立城山中学校 三年

帰り道

長谷川 蒔

一つも星が出ていない、雲がかかった夜の空。その下でたった一人、自転車をこぐ私。自転車のライトは、2 m程前までしか照らすことができないし、街灯なんてほとんど立っていないから、いつも通る道でも別の道のように感じる。いつもと変わらないのは、私の歌う曲だけ。私はさびしい時、気分を上げたい時に歌を歌いたくなる。特に自転車に乗って、一人で帰る時は、大きい声で歌う。でも今日は、真っ暗な夜だから、鼻歌でがまんしよう。少し時間がたった。その間も私は自転車をこぎ進めた。空にはまだ雲がかかっている。風が出てきた。しかも向かい風だ。立ちこぎじゃないと進まない。後ろから車が私をぬかして行く。前から車が来るよりもまし。だって、前からだと車のヘッドライトがまぶしいじゃないか。それに、後ろからぬかれた瞬間は、風が吹いて、汗ばんだTシャツを乾かすから涼しくなる。

また少し時間がたった。目の前には長い坂道。私は、勢いをつけて登り始めた。ここまで

来ると、いつも歌う余裕がなくなる。周りには、家が見当らないから心細くなる。さびしい時に「さびしい？」と聞いてくれる相手もない。一人で帰っているのだから当たり前だ。それでも、さびしいと思った時は、私は空を見る。空には、いくつもの星が輝いていて、月は黄色く光っている。でも、残念ながら、今日は曇り。星や月は見えない。それでも、私には分かる。雲の上には、いつもと変わらず星や月が輝いていることを。息が切れてきた。考え事をしながら、自転車をこぎ、坂を登るのは、体力のない私にとつて、きついことだ。でも、考えごとをして、それが口に出してしまうのは、そういう性格だから、しかたがない。

また苦勞している間に、時間がたった。ようやく、坂を登りきった。まだ、家は見えない。暗いことから、見えるはずもないのだけれど。ふと、私の頭に「星の王子さま」を読んだ時に考えたことが思い浮かんだ。「もし、星の王子さまがいるのなら、どの星にいるのだろう。」と。星の見えない夜に私は何を考えているのだろう。周りの星が笑っているじゃないか。そうやって、私は一人ほほえみながら家に帰った。付け加えると、コオロギかスズムシかキリギリスか何かの虫が鳴く声を聴いて少し安心した気持ちになりながら帰ったのだ。

こんな風に、ただの帰り道、いろんな事を考えながら毎日過ごせる人は幸せなのだと思う。

最後に、今まで書いたことは私が実際に考えていることとは、遠くかけ離れている。私に似た、私などとは、比べ物にならない程に純粹で、「星の王子さま」を読んだ事がある少女がいたら、その子が考えそうな事を書いた。

そして、私はその少女のようになりたいと強く思っている。

中学生部門

佳作

兵庫県 姫路市立広畑中学校 二年

大人と子どもの狭間

結城 潮音

私はしんどいなあと考えた。中学生といえば、色々なことができるようになるし、ちょっとした大人の気分にもなれる。中学生になるまでそう思っていた。しかし、いざ中学生になってみると違った。これやって、と頼みごとをすると、「もう大人でしょ。」と言われ逆に失敗をすると「まだ子どもなんだから。」と言われる。大人なら大人、子どもなら子ども、とはつきりしてほしいと思う。そうでないと、都合のいいように利用されている感じがするからだ。中学生っていいなと言われるが、勉強は難しくなるし部活だって忙しくなる。それに上下関係だつて重要になってくる。こんなことばかりが続くと、何でこんなことをしてるんだろう、自分のためというが本当に自分のためになっているのだろうか、将来に生かすことができるのだろうか、と思ったこともある。

中学二年生になると、一週間仕事を体験するトライやる・ウィークというものがある。そんなモヤモヤした気持ちの中、私は歴史博物館に行くことになった。

トライやる・ウィーク初日、職場の方たちにあいさつをすました。そのあとに、私達に

指導をしてくださる方々とのミーティングが始まった。そこで自己紹介を一人ずつしていくのだが、指導者の方が変わった自己紹介の仕方を注文してきた。それは、三十秒から一分の間に自分の名前、中学校名、趣味、部活名を言うものだった。指導者の方は、「もう中学生だし、社会の場では限られた時間の中でやらないといけないこともある。」と言っていたが、私には何でこんなことをしなければならぬのか、という思いでいっぱいだった。練習なしのぶっつけ本番で、限られた時間の中で自己紹介をする。しかも全く知らない人の前で。もちろん仕事体験をするために来たのだからやるしかないのだが、まだ中学生なのにこんな本当の仕事みたいなことをするのか、と思った。

色々な仕事を体験していくなかで、博物館の仕事体験者は、三日間にわたって展示品をお客様に説明するという一番重要な仕事があった。この二日間のために、自分たちで展示品について調べ、原稿も自分たちで作り練習もたくさんした。

そして当日。私は持ち場についていた。私は緊張しやすいので、自分からお客様に話しかけるのは大変だったが、展示品の説明をし終えると、「すごいね、さすが中学生さんだね。」と言ってくださった。本当にうれしかった。何回も練習したかと思った。こんなにもうれしかったのは苦労した分、達成感があったというのもあると思うが、さすが中学生さん、と大人として見てくれたからというのが大きかったのだろう。

自分で歴史について調べ、紙にまとめるという瓦版作りというのがあったのだが、一人でもできることを「これできる？分かる？」と何回も言われ、もう中学生だからそれくらいできるのに、と思う部分もあった。

自己紹介の時は中学生は子どもだ、と思い瓦版作りの時は中学生は大人だ、という場合によって自分の意見も変わってしまっている。この文の初めに頼みごとをすると「もう大人でしょ。」と言われ、失敗すると「まだ子どもなんだから。」と言われ、都合のいいように利用されているみたいだと書いたが、今思えば自分もそうだったということに気がついた。自分も、都合が悪くなれば中学生はまだ子どもだ、中学生はもう大人だ、というように利用していた。

大人には大人の、子どもには子どもの良さがある、と私は思う。大人はなんでも一人でできるという感じがするし、頼りやすいというものもある。反対に子どもは、成長している姿を見てもらえる。例えば、大人が一人で買い物に行き、一人で料理を作ったとする。これを聞いてもほとんどの人は何も思わないだろう。しかし、子どもが一人で買いものに行き、一人で料理を作ったとすると、周りの人はきつと感心するだろう。もう一人でこんなことができるようになったのか、と。

大人も子どももどちらもそれぞれの良さがあるのだなと改めて思った。あるときは大人

だったり、またあるときは子どもだったり……。本当にどちらなのかはつきりしてほしい、とそう思うことも少なくはない。中学生は大人なのか、子どもなのか分からないから大人と子どもの狭間だと思った。

トライやる・ウィークを通して、大人と子ども、それぞれに魅力があるから、大人と子どもの両方の立場になれる中学生って一番良いのではないかと思った。大人と子ども、両方の立場にいるからこそはつきりしてほしいと思うこともあるが、それでもやはり両方の立場でいられるのはすごく素敵だなと思った。

高校生部門

最優秀賞

兵庫県立姫路西高等学校 二年

うら

岩間 成美

授業中、強い風にあおられてカーテンが広がる。その拍子に、ふとカーテンの向こう側の世界に目がいく。なぜか、目が離せなくなる。布一枚で隔てられているだけなのに、あそこはまるで別世界だ、と思う。私が今いる場所、見慣れた教室の風景を「おもて」だとすると、カーテンと窓との間に存在するわずかな空間は「うら」だろう。つい先ほどまでは自分が座っている教室が自分にとっての全てで、授業の内容が最も大切だった。でも、私がふと気づいてしまったその空間には、数列も明治維新も化学式も英語長文読解も、誰かの居眠りも先生のお説教もおかまひなしにゆったりと時間が流れている。私たちの授業とも人間関係ともまったく関わらない空間が、ほんのすぐそば、手が届く範囲に存在するということ。それは私に、不思議な安心感を与えてくれた。

それ以来、授業中や休み時間のふとしたときにカーテンの裏のその空間に目を遣るようになった。そして、その空間が存在することを確認する。きっと、私が見ていないときにも、同じように存在しているのだろう、と思う。その確かさ、頼もしさに肩の力が抜けるのを

感じる。私はすっかり「うら」に魅了されてしまった。

そういえば、昔から「うら」が好きだった。折り紙の裏の淡い色合い、道端の木の葉の裏に透ける葉脈を、飽きずにずっと眺めていた。海で拾った貝殻。表の模様は同じように見える二つの貝殻でも、裏を見てみるとまったく違った色を持っていることが分かる。私にだけ秘密をうちあけてくれたようで、とても嬉しかった。やはり、「うら」には、不思議な力があるのかもしれない。

最近、また一つ魅力的な「うら」に出会った。学校からの帰り道、いつものように電車から降りた。なぜかとても疲れていた私は、ホームの端をのろのろと歩いていた。何気なく上を見上げると、駅名を表示している看板の裏側が目に入った。立派な顔をして駅名を告げる表側とは違い、裏側はさびついていてどこか寂しそうだった。ため息をついているようで、それでいて私が「大変ですね」と声をかけると「そうそう。誰も気づいてくれないしね」とでも答えてくれそうなたかき、親しみやすさを漂わせていた。人の流れがせわしなくてあまり好きではなかった駅のホームだったけれど、ずっとここに立っていたい、とさえ思った。電車通学を始めてから一年半の間、毎日通ってきたはずの場所。もう慣れきったと思っていた場所に、こんな世界があったなんて。初めて駅のホームが身近に感じられた瞬間だった。

どうして、こんなにも「うら」に惹かれるのだろうか。きっと、「おもて」の世界で数列とも化学式とも、ときには煩わしい人間関係とも付き合っていかなければならないことを知っているからだと思う。「うら」はあくまでも「うら」であって、決して「おもて」にはなり得ない。でも、疲れたときや行き詰ったとき、少し「うら」に想いをめぐらせてみる。その存在を意識するだけで、少し「おもて」の世界が違って見える。そうすると、何とかやっていけそうな気持ちになる。そうやって一歩ずつ進んで行けば良いのだろう。

高校生部門

優秀賞

兵庫県立加古川東高等学校 一年

頑張るということ

小林 あかり

この夏、地球の裏側ではオリンピックが開催されている。テレビに映る選手たちは出身国を問わず、自分の競技でより良い成績を残すことだけを考えて努力してきた人ばかりである。一人一人がそれぞれの競技に強い思いを持っているからこそ、四年に一度のオリンピックはこんなにも輝くのかと、改めて感じさせられた。

競技を観戦しながら考える。あなたが人生で一番必死に、一生懸命に頑張ってきたことはなんですか。もしそう聞かれたら私はなんと答えるのであろう。結局私はその質問に答えを出すことができなかった。私にはそれがすごくショックだった。

そもそも私には、多くのことをしすぎなのではないかという悩みがあった。始めた習い事は五つ。今も続けているのはそのうち、ピアノ、習字、ダンス、ギターの四つである。中学校で初心者としてソフトボール部に入部して、高校では違う部活でドラムを始め、書道部と兼部している。どちらも大会などから離れている部活なので、毎日汗を流して必死になっているとは言えない。

こういった姿勢が嫌いなわけではないが、どのことに対しても同じような気持ちで取り組んでいる私は、ふと周りで一つのことだけに夢中になって頑張っている人がうらやましくなってしまう。

でももし、今やっていることをどれか一つにしぼれと言われたとしても、私は決断できない。どれも自分がやってみたいと始めたもので、全てが同じくらい自分にとって大切なものである。こんな気持ちがあるからこそ、一つのことを一途に頑張るといふ姿勢は程遠く、その難しさをひしひしと感じている。

また、将来の夢や目標がしつかりと決まっていけないというのも、私を不安にさせる原因だと思う。年齢が上がるにつれて、大学受験や就職が近づいてきている。ゴールがあればそこに一直線に走って行けそうな気がするのに、まだ目標が定まらないことに焦りを感じる時がある。

やっていることが多いだけでなく、それぞれに対する私の頑張りや趣味程度である。そのことがますます私を不安にさせる。努力のできない人間が、社会に出て何を努力できるのだろうか。いろいろなことに手を出しすぎて、全てが中途半端なまま終わってしまうのではないか。私の浅いスキルは何かの役に立つのだろうか。

そんな中、偶然母の話が私の考えを変えてくれた。こんな話を聞いたことがあると、

母は私に教えてくれた。

未来に向かつて一つのことを頑張りが続けるのは素晴らしいことだが、それだけが自分の力になるわけではない。どうなっていくのか予測できない未来へと、今の自分にできるいろいろなことをする。それは、自分の道をたくさん拓き、その分たくさん景色を見ることができ、未来に選択肢を増やしてくれる。遠回りになることや無駄に思えるようなことが、後々の自分を直接的でなくても、どこかで支えてくれる糧になる。

それを聞いて、今までの胸のつかえが一気に取れたような気持ちになった。私は「たくさんのことに挑戦する」ということを一途に頑張っているのだと、そんな風に思えるようになった。いつか、今の私のいろいろなことへ向いている関心が、何か熱中できる一つのことへと導いてくれると。だからまだ、あなたが人生で一番必死に、一生懸命に頑張ってきたことはなんですか。という最初の質問に答えられないのは当たり前なのだ。ならばとりあえず今は、一つのことにしぼらなくていいから、私は私の広く浅いスキルをこれから少しずつ少しずつ深めていこう。そんな新しい気持ちでテレビを見ると、遠くで燃え上がるリオの熱気を今までより身近に感じられた気がした。

高校生部門

佳作

兵庫県 姫路市立琴丘高等学校 二年

お手頃な幸せ

中川 知優

部活に参加するため、制服に着替えて家を出た。玄関のドアを開けるとじめじめとした暑さに包まれる。夏休みに突入した今、外に出ている人はあまりいない。視線を上げてみると、真っ青な空が目に入った。白い雲と相俟って、何とも涼しげだ。それを励みに暑さを耐え、学校へと自転車に向かっていった。山に隣接した私の学校は木が多く、虫の音がよく聞こえてくる。力強く響く蝉の声や、太陽に向かって真っ直ぐに伸びる向日葵に、生命というものを感じた。部室である美術室に着くと、油絵の具の独特な匂いが鼻腔を掠める。苦手だという人も多いが、私はこの匂いが好きだ。制服に沁み着いているからか、嗅ぐと落ち着くのだ。体育館から聞こえてくる運動部員たちの声をバクミュージックに、私は鉛筆を手にして紙に向かった。

私がこうして日常の中の小さな事柄に目を向けるようになったのは、極最近のことだ。とある世界的に有名な医師の言葉に影響されたのが始まりだった。その医師曰く、幸せとは楽しい考え方が心を占めている状態を言うらしい。考え方だけで人が幸せになれるのかと、初めは半信半疑だった。嫌なことから逃げるための言い訳のようにも思えた。しかし、

試してみなければ真偽は判らない。そのため、私は日常のありふれたものに目を向け、確かめてみることにしたのだ。

元々外に出ることがあまり好きではない私は、外出しても早く家に帰りたいとか、そんなことばかりを考えている。視線を下げてしまっていることも多い。そのため、まずは目線を上げてみることにした。するとどうだろう。今までと変わらないと思っていた景色の中に、小さな発見が幾つもあったのだ。近所の家の塀の隙間から、小さな花が咲いていたとか、そんな何でもないことばかりだったが、私にとっては衝撃的だった。こんなことも知らなかったのかと驚いた。つまらないと思っていた通学路も、案外楽しいものだと気付いたのだ。

では、目に見えないものにも何か変化があるのだろうか。そう思った私は、今度は音に注意を向けてみることにした。しかし、何の変化も発見も得られなかった。毎日通学中に耳を澄ましてみるが、昨日と何ら変わりが無いのだ。視覚での変化に楽しさを覚えていただけに、落胆してしまった。早く帰りたいという思いを抱えて登校し、授業を受ける。

ある教科の授業中に、教科書の問題を解く時間があった。それが中々に難しく、解けずにはいた。一度頭を空っぽにしようと思えば問題から意識を外すと、いつもは賑やかな教室が静かなことに気が付いた。文字を書く音がやけに大きく聞こえるくらい静かだったのだ。風で木の葉が揺れる音、グラウンドから響く楽しそうな声や、微かに聞こえるひそひそと話す声。

様々な「音」が聞こえてきた。すつと、頭が軽くなったように感じた。再び問題に取り掛かってみると、するりと解けたのだ。変わらないからこそ人を落ち着かせるものもあるということ、私はこの時初めて知った。

その他にも、冷えた指先が日に当たってじんわりと温まると気持ちが良いことや、冷たい水が体の内側から熱を冷ましていく心地良さなど。目を向けていなかっただけで、「幸せの種」というものは、どこにでもあったのだ。顔を上げれば変化に富んだ風景が私を樂ませてくれた。いつも耳にする日常の音は私を落ち着かせてくれた。肌で感じた一様な温度は私の心を満たしてくれた。世界は広くて深いとは、よく言ったものだと思う。私の周りだけでこれだけの発見があったのだから、「幸せ」になれる要因など、そこらじゅうに転がっているのだろう。それに気付けるか否かが問題なのだ。

私は最初、ある医師の言葉の真偽を確かめるために「幸せの種」を探し始めた。しかし今では、どんな発見があるのだろうかと期待しながら過ごすようになった。そこで私はようやく、医師の言葉は本当だったのだと悟った。いつの間にか私は、外出することを苦に思わなくなっていたのだ。それどころか、楽しみにさえ思えるようになっていた。

明日も部活がある。

明日は一体、どんな幸せに巡り会えるのだろうか。

一般部門

最優秀賞

兵庫県 姫路市

世界を名付ける

天野 浩子（主婦）

晴れた日には一歳半の息子を連れ、日に一度は必ず外出する。歩き始めて行動範囲の広がりつつある息子を家に閉じ込めておくのはかわいそうでもあるし、自分の気分転換にもなるからだ。

手をつないで、あるいは乳母車を押しながら、散歩というより牛歩のごとくのんびりとして私たちは近所を彷徨する。拙い歩みと芽生え始めた好奇心が進路を妨げてなかなか前へは進まない。道端の草一本にも歩みは滞り、玩具のような小さな指が何かを指す。

「ん」

と短い御下問があると、私は

「それは、たんぼだよ。」

と答える。息子は

「ぼっぼ」

と元気よく復唱すると、満足げにまた歩き始める。しかし歩みはすぐに止まり、

「ん」

と今度は別の方向を指さす。

「猫じゃらしよ。」「それは石」「ちようちよ」・・・私は答え続ける。行く手には高い空があり、道はどこまでも続いているように思える。

そんな時、私は思う。親が子に教えてやれることは、結局これがすべてなのかもしれない。道の隅っこに落ちている小さい固いもの。雲のあわいをひらひらと飛んでいるあの美しいもの。それらの名前を一つ一つ教えてやること以上に、この世で生きるのに役立つことがどれほどあるのだろうか。

彼の世界はまだ始まったばかりで、標識のないあてどのない「外」はどんなに広大無辺に映っていることだろう。天地の分かれたはじめの頃、名も知らぬ美しい、あるいは恐ろしいものたちの満ちた世界に生まれ落ちた私達の祖先は、大人でも不安と好奇心をたくさん抱えていたに違いないのだ。そうした心がたくさんのものに名前をつけてきた。「草」や「木」というのは人間が勝手につけた呼び名である。しかし名があることでそれは「こちら側」の世界に属するものとなる。そうして世界を自分の内にとりこんできた歴史がそのまま、今の私と息子に重なっていると気づいたとき、私もやはりこうしていつかの日に、母と手をつないで口移しに世界の名前を教えてもらったのだという事実にも気づく。

私を知っていると思っていたこと。当然のように目に映し、意識の表面を流されてゆく

ものの名前たちは、初めから私の内にあつたのではない。もともとは母の内に、祖母の内に、その母の、おや祖たちの内にあつた世界が連続と受け継がれてきたものだったのだ。

何の変哲もない近所の道を歩くだけでも、子供と一緒にだとそんな新しい発見や驚きがある。それに、普段は気にも留めないものの名をあらためて言葉にするというのは、新鮮な気持ちちがしてなんとも楽しいものだ。まるで世界を一つ一つ名付けなおしていくように、自分の精神も言霊によつて洗われ、新しくなっていくような気さえする。

そんな特別な時間を与えられたことに感謝しなくてはならない。育児をしていると孤独や不満を感じることは多いし、専業主婦なので、育児をしながら社会で活躍する女性の記事などを読むと自分の将来設計に対して不安になったり自信を無くしてしまう時もある。けれど、一度に選べることは多くはないのだ。私が選んだ人生の付録がこの豊かな時間であるのなら、ずいぶんと当たりの人生なのだと思います。次の予定が無いからこそ、自分の内なるものを見つめ返すことができたのだから。

ゆつくりとありふれた路地をめぐりながら、この世に棲む小さな美しいものたちを息子と探していく。つないだ小さな手から教えてもらう愛おしい一瞬一瞬を、いつか彼は忘れてしまうのだろうけれど、それでも遠い祖先から続く命に深く感謝しながら、私は今日もまた世界を名付けていくのである。

一般部門

優秀賞

宮城県 気仙沼市

また会っ未来のために

感王寺 美智子（自営業）

「ファイト〜」

パン！パン！パシッ！パシッ！野球部のキャッチボールの音が、響いている。マウンドに、夕日が赤いタクトを、ゆっくり伸ばしてくると、校舎から、カーペンターズの「青春の輝き」が、聞こえてくる。下校時間の音楽だ。その音楽を合図に、グラウンドに建つ、あちこちからのプレハブから、トントントン、コトコトコト、夕食の支度の音が聞こえてくる。ここは、中学校のグラウンドの半分に、建てられた仮設住宅なのだ。

「お疲れさん。ほれ、いくぞー！」

自治会長さんが、フェンスを、越えて飛び越えてきたボールを、グラウンドへ投げ返す。八十歳を過ぎているが、昔、野球部にいたそうで、なかなかの球筋だ。

「ありがとうございませ〜す」

小柄な少年が、ボールを取りこぼして、走っていく。

「へタクソ〜！」

会長は、少年に、喝を入れる。そして微笑んだ。

「ごん子たちは、おらたちの未来だっちゃ」

会長さんは、今日の仮設を出て行く。

ここに越して来たとき、会長さんは、言った。

「仮設住宅っていうとき、みんな、辛いでしよう、とか、大変ねえ、とかばつか言うべ。だけんどさ、おらたちは違う。おらたちはさ、十年後、ここのグラウンドさ、また集まって『あん頃は、楽しかったな』『あん時は、おもしろかったな』そう言って、みんなで笑って話すべ。だからさ、その為にさ、みんなして、楽しいこと、おもしろいこと、ここで、いっぺえやって暮らすべ。楽しい思い出いっぺえ、つくるのさ。泣いてる暇がねえほどさ。ここでん暮らしは、おらたちの人生の付録みてえなもんだ。ほんだら、みんなで、宝モンの付録にすっぺ」

だから私達は、みんなで、いろんなことをして、暮らした。

グラウンドの隅っこに、小さな畑を耕し、野菜を育てた。収穫したジャガイモで、野球部員たちに、カレーライスを作ったあげた。

プランターには、溢れるほどの季節の花を育てた。

中学校の生徒たちも一緒になって、七夕づくりや、クリスマスツリーづくりをした。

懐かしいふるさとの歌を歌い、フォークンクッキーも踊った。

一緒に沢山笑って、一緒に少し泣いた。

一生懸命、楽しい日々を過ごした。

そして、震災から、五年過ぎ、この仮設住宅からも、沢山の人が、引っ越していくようになった。

震災で、なにもかも失くした被災者の皆さんの荷物は少ない。引越しは、いつも小さなトラックだ。

「荷物は、ちつとだども、思い出が積みきれねえっちゃ」

そう言って、笑いながら涙ぐむ。やっと、住まいが決まり、嬉しい気持ちは、いっぱいだが、ここで、みんながゼロの状態から、創ってきた宝ものような思い出。それを思うと、やっぱりお別れが少し寂しいのだ。だけど、私達は、涙を拭いて、手を振る。

「十年後に会うつちゃー!」と。

「おい！チビ！もうひとつ、いぐぞー!」

自治会長さんが、真剣な眼差しで、ボールを振りかざしている。

「お願いします！」

小柄な少年は、ぐい、と足を踏ん張り構える。

スピードのあるボールが、フェンスを越えてゆく。

ピシッ！

ボールは、力強い音をたてて、少年のグローブに飛びこんでいった。

「よし！気仙沼の未来、頼むぞ！」

「はいっ！ありがとうございます！」

少年は、帽子をとり、深々と、頭を下げた。

夕焼けに染まった、会長さんの小さなトラックが走り出した。

その時だった。

「青春の輝き」のメロディーが、再び、大きく聞こえてきた。見ると、グラウンドに、野球部員たちが整列し、大きく手を振っていた。

会長さんは、振り向かない。

十年後、また会う未来の為に。

あかあかとした夕日が山に沈んでいく。

明日、また、海に昇る為に。

一般部門

佳作

嘘の功罪

広島県 広島市

榎並 掬水（無職）

「雀が鳴いとるようじゃのう」

母がぼつりと、かすれた小声で話しかけてくる。せつなに、母の寝耳に届いたのと同じ鳴き声を、母といっしょに聞きたい気持ちに駆りたてられた。母の布団のすぐ脇に、ごろりとばかり、横になっていった。

「今日は、晴れとるかいのう、降とるかいのう」

もう百姓仕事など儘ならない体にあるにも拘らず、その日の空模様は、いつもの習いでふと気に懸かってしまうらしい。齡八十をとよわいづくに超えて、衰弱しきつた今では、起きあがることさえも叶わない。わずかに顔ひとつを、明るい障子の側に向けた。

「いまは、春かのう、秋かのう」

私は立ちあがった。外はまだ小寒いたため、障子を十センチほどそろりと押しやって、母の方を振り返った。母は、狭い隙間から、はるか遠くを眺めるように目をほそめた。視線は虚ろに宙をさまよっている。流れ込んでくる微かな風を、じっと追いかけているさまに

あった。

「カヤノ婆さんに会いたいよ。声をかけてみてくれんかのう」

とつぜん、母が言った。顔をこちら向きに動かすと、すがるような眼差しを、私の方に投げかけてきた。私は、驚きと戸惑いと、半々に胸元を突きあげられて、とつさに母のうえに戻っていた。

「婆さんは、もうおらん。とつくのむかしに死んでしまったじゃないか」

母の両目が、大きく見開いた。精いっぱいの中から体じゅうに滾たぎらせて、顔を真っ赤に染めた。必死の面持ちで、私を見据えてきた。しまった、その瞬間に過よぎった。母には、今、昔と今とがひっくり返っている。今が昔に、昔が今になっている。母の母は、母のなかで、今現在もすっかり生きている。息を呑んだまま、私は、その場に声を失った。

「……」

なにか応えてやらなければ——焦れば焦るほど頭のなかが真っ白になり、次のひと言が、どうしても口を吐いて出てこない。いきなり、見開いたままの母の目に、光るものが潤んだ。しばらく私を見守ったあと、やおら天井に向かって視線を戻すと、母は、涙の溜たままった臉を幾度か瞬しばたいて、程なく、スウスウと小さな寝息をたて始めた。

老い衰えた母の寝顔を恐る恐る見おろしながら、私は、小さな空咳といっしょに、乾いた

唾を呑み込んだ。そのひと呑みが、石さながらの重たい塊となつて臓腑に落ちて、胸の奥まった一隅に沈殿していった。

母が亡くなつてから、早くも三十年余りが経っている。いつの間にか、私も喜寿の年境を渡り越した。それにしても、あのととき呑み込んだ石のような塊が、いまだ私のなかに重たく沈んでいる。それが、なにかにつけて、奥深くから込みあげてきて、胸板を叩いてくる。過ぎ去つていったはるか昔が、昨日今日のできごとさながらに今現在にひき戻されてくる、そういった摩訶不思議な、神のお恵みともおぼしい母のあのいつとときに、どう処しよしようもなかつた私の不甲斐なさへの、悔やんでも悔やみきれない悔過の一念が、今も、私のなかから消え去ろうとはしない。

が、いつぼうで、もしも母が、母以外のだれか他の人であつたなら、と思う。もしも母ではなかつたとしたら、差し向かうその僅かなあいだにさえも、ほぼ間違ひなく、なにかの繕つくろい言を洩はらしたにちがいない。

『婆さんも会いたがつとる。早はやう治らんと——』

『稻刈りがすんだら、さつそく飛んでくるそうじゃ』

などなど、いつとき先に期待を抱かせてみたり、そんな気慰めを苦もなく言い放つて、その

時その場を凌いだに相違ない。今時分になって、私は、そんな絵空ごと、つくり話に、そぞろに思いを巡らせてみたりもする。

母と差し向かったあのとき、どうしても次のひと言を告げることができなかった悔過の一念のすぐ脇で、そんな委細が、ほそぼそながらも脈うっている。忌憚なく言って、これっぽっちの穢れも邪なものもない、ただひたすらな一心のせい、どうしても、次に続くはずの嘘のひと言が、私の口について出なかった。一瞬のうちに母とのあいだに行き交った、私の偽りなき心、そういう言葉、文言でもってしかなぞらえようがない。子ながらに親に寄せていった一途な心、それよりほかの、なにもものでもありはしない。

今では、その委細が、嘘を吐くことのできなかつたそのわけが、恨めしく哀しい思いの裏側で、一毫の救いともなっている。

平成 28 年度 第 2 回 藤原正彦エッセイコンクール

概 要

■ 審査員

藤原正彦 姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）

プロフィール

昭和 18 年 旧満州生まれ。新田次郎・藤原てい夫妻の次男。
東京大学理学部数学科卒業、同大学院修士課程修了。理学博士（東京大学）。
コロラド大学助教授、お茶の水女子大学理学部教授を歴任。
昭和 53 年『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイスト・クラブ賞、平成 22 年『名著講義』で文藝春秋読者賞を受賞、平成 26 年『孤愁』でロドリゲス通事賞を受賞。
そのほか、『国家の品格』『決定版この国のけじめ』『天才の栄光と挫折』など著書多数。
平成 26 年 4 月、姫路文学館長に就任。

■ 作品規定

対象は中学生以上、テーマは自由、400 字詰め原稿用紙 5 枚以内。
日本語で書かれた自作で、未発表のものに限る。平成 28 年 9 月 13 日締め切り。

■ 賞

「中学生部門」「高校生部門」「一般部門」ごとに〈最優秀賞〉〈優秀賞〉〈佳作〉各 1 編。
賞状、藤原正彦館長のサイン入り著書と副賞の賞金（中学生・高校生は図書カード）を贈呈。

■ 応募状況 … 応募総数 1,002 点

部門別	応募数	兵庫県内			他府県	海外
		姫路市内	姫路市外	県合計		
中学生部門	111 点	30	80	110	1	0
高校生部門	147 点	65	80	145	1	1
一般部門	744 点	123	133	256	487	1
合計	1,002 点	218	293	511	489	2

中学生部門：学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）9 校、個人応募 5 人。
市外では加東市、宝塚市、明石市、三重県から応募があった。

高校生部門：学校応募 9 校、個人応募応募 5 人。

県外では愛知県から、海外ではアメリカ（日本人）から応募があった。

一般部門：20代から90代まで各世代から応募があったが、そのうち60代以上が過半数を占めた。
他府県からの応募は、北海道から鹿児島県まで全国各地に及んだ。
海外からの応募者 1 人は、フランス在住者（日本人）である。

■ 表彰式

日時：平成 29 年 1 月 14 日（土）午後 1 時 30 分～3 時

会場：姫路文学館 講堂（北館 3 階）